

## 2021年11月21日聖霊降臨後最終主日説教

ダニエル書 7章 9-14節

ヨハネの黙示録 1章 1-8節

マルコによる福音書 11章 1-11節

本日は、聖霊降臨後の節の中で最終主日です。降臨節前の主日でもあります。またキリストによる回復と題された主日でもあり、王なるキリストの主日とも呼ばれます。いろいろと沢山の事柄が付け加わる主日ですが、教会歴が変わる節目に当たる時だからです。来週11月28日(日)降臨節第1主日から新しい暦が始まりますが、その日の礼拝は、高橋宏幸主教様の司式で牧師任命式と堅信式が行われます。先週教会委員会で、その日限定ですが、従来通りの感染対策を施しつつ、Aグループ、Bグループに関係なく、礼拝にご出席いただくこととなりました。クリスマスの礼拝については、また12月に検討いたしますが、新しい教会暦の始まりを、ご一緒に迎えたいと思います。

さて、先週の聖書日課は、「終わり」が主題でしたが、今週も同じように、「終わり」が主題です。しかし、同時に、「始まり」も主題です。一般的に終わりは、何かの始まりと言われますが、教会の信仰において、そのような概念は、信仰者一人ひとりの死が、新しい命・本当の命の始まりであるという意味で大切です。

『聖書』(新約)を通じた教会の信仰においては、特にそのことが強調されています。しかし、ユダヤ教では、信仰者一人ひとりの来世の命というもの、重要視されず、『聖書』(旧約)を通して、そのことが強調されることはありません。ただし、主なる神様の支配という形では、本当の命という概念が、間接的に表現されていると思います。

本日の旧約日課は、先週と同じ「ダニエル書」ですが、少しもどって7章です。7章全体は、ダニエルが見た4つの獣の幻について語っていますが、それは2章の内容とも関連しています。2章は、ネブカドネツアル王が見た幻を、ダニエルが説くという描写でしたが、ここ7章では、ダニエルが見たという視点で描かれています。4つの獣とは、バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア(アレクサンダー大王)、ローマを暗示していると言われていています。それぞれ、中近東、地中海世界で大きな力を持った国々です。最後のローマは、まだ帝国ではなく共和制ですが、『聖書』(旧約)の時代から、イエス様の活動された時、そして『聖書』(新約)の時代、さらに教会の歩みの時代を通して存在する国ですから、その壮大さを感じます。

さて、そのような国々について、ダニエルは幻を見たのですが、そこには「夜の幻をなお見ていると、見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り、「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え、彼の支配はとこしえに続き、その統治は滅びることがない」(ダニ7:13-14)とあります。ここは、それぞれの国々の滅びの後に来る、新しい神様の支配が期待されています。ここには「人の子」という言葉があ

ります。「ダニエル書」の内容から考えますと、この「人の子」は、支配される方です。それゆえ、主なる神様とも考えられますが、誰を示しているのか明確ではありません。ただし、先週も少し触れました「マルコによる福音書」13章「小黙示録」と呼ばれる部分の26節で、「**そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る**」とイエス様が語っています。そこから、教会の信仰としては、この「人の子」は、イエス様、ことに再臨されるイエス様であると解釈できます。

イエス様の登場前に書かれた「ダニエル書」が、イエス様のことを「人の子」として指し示しているわけではありません。また「人の子」が誰であるかよりも、その「人の子」を迎える集団であるイスラエルの方に注目が集まっています。本日の旧約日課の後に続く7章の終わり部分では、「**天下の全王国の王権、権威、支配の力は、いと高き方の聖なる民に与えられ、その国はとこしえに続き、支配者はすべて、彼らに仕え、彼らに従う**」（ダニエル7:27）とあります。「聖なる民」とは、イスラエルのことであり、「その国」とは、主なる神様の支配、つまり神の国とも言えます。ダニエルの見た幻は、強い国々の支配があっても、最後には、イスラエルの人々の王国が、続くことを暗示また預言しているのです。そのような預言は、歴史的には実現することはなかったのですが、いわゆる終末時における千年王国のような期待として残ったといえます。もちろん、そのような期待は、イスラエルが大帝国となって世界を支配するようなものではなかったと思いますが、王国として独立しまたまとまった集団として迎えることは想定されていたと思います。さきほどローマの壮大さについて触れましたが、イスラエルという存在は、歴史的現象と一致するかどうかは別にしても、ローマの存在をはるかに超える、長い時の尺度と大きな規模の影響を持つことがわかります。

さて、本日の福音書は、「マルコによる福音書」です。ただし、B年としてのお話の連続ではありません。王としてのキリストについて考えるための、イエス様のエルサレム入場のお話です。お話は、イエス様が二人の弟子を遣わして、知らない人から「子ろば」を借りるといふ不思議な場面と、イエス様が、その子ろばに乗って、エルサレムに入場し、人々から熱狂的に受け入れられるという二つの場面からなっています。これらが示す事柄は、イエス様は、王であるが、他の王とも人々が期待する王とも、全く違うということです。しかし、エルサレムの人々は、そのようには受け止めなかったのです。

最初に子ろばについて触れますと、イエス様が子ろばに乗ったのは、単なる偶然ではありません。「ゼカリヤ書」9章9節に次のように書かれているからだと思われます。「**娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る、雌ろばの子であるろばに乗って**」。イエス様ご自身も、『聖書』（旧約）が示す事柄に即して行動されたのです。

子ろばを借りる場面で、イエス様は二人の弟子に、「**向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなこと**

をするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい」(マルコ 11:2-3)と告げます。そしてお話はその言葉通りに展開するのですが、どうして子ろばの飼い主が、その言葉だけで簡単に貸してくれたのか、不明です。不思議なやりとりですから、理由について、いろいろな想像ができます。ただし、その不思議なやりとりを通して言えることは、「子ろば」を借りるといふ小さい出来事からすでに、人間の思いを超えた何かが始まっていたということです。つまり、イエス様が、エルサレムの人々が期待する王と異なるということは、準備の段階から示されていたのです。

さて、イエス様のエルサレム入場は、受難週で棕櫚の週日、復活前主日の起源とも言えるお話です。「多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。』」(マルコ 10:8-10)、この描写は、明らかにエルサレムの人々が、イエス様を力強い指導者として、王として迎え入れている様子を描いています。イエス様は、武装しているわけではなく、また武装した仲間を引き連れたわけでもなく、馬ではなく、弱々しいこどものろばに乗り(しかも借り物)、どちらかという、勇ましい姿というよりも、滑稽な道化のような姿で入場したのですが、人々は、力強い王であるかのように歓迎したのです。そして、先に見た「ゼカリヤ書」を想起したとしても、そのような弱い姿に、本当に強い王を見てしまったのだと思います。

イエス様の今の姿が、どれほど弱々しさを強調したとしても、そしてそれまでのイエス様の活動が、力によって相手を倒すような行動はしていなかったとしても(悪霊などは力強く追放しましたが)、エルサレムの人々は、王として迎え入れたのです。「マルコによる福音書」という物語は、人間がイエス様について出した答えで、正しいけれども間違いであるお話をいくつか描いています。ペテロがイエス様を、あなたこそメシアですと答えたお話もそうですが(マルコ 8:29)、ここも同じです。イエス様が王だというのは正しい答えなのですが、力強い王、この世の力の支配者という意味の王ではないです。

しかし、そもそも『聖書』(旧約)は、イスラエルの王を、力強い王、この世界の力の権力者として描いていたわけではありません。イスラエルの初代の王サウル自体は、弱小集団であり、あまり模範的ではないベニヤミン族から選ばれました。主なる神様は、神の民、イスラエルに王をおくが、それは世俗の王と異なることを徹底して強調してきたのです。しかし、その強調は、つねにイスラエルの誤解と対峙していました。そして、その誤解はイエス様の段階になっても、解けなかったのです。そのように考えますと、『聖書』は、イスラエルという集団の歩みを描くことを通して、人間とは、自己の思いや願望をなかなか超えることができない存在であることを、示しているといえます。

それでは、イエス様と弟子たちが、エルサレム入城の仕方をもう少し考えればよかったのか、もっとより弱く見えるように一層工夫すればよかったのかとい

うとそうではないと思います。エルサレムの人々が期待してしまっている以上、どのような姿で入場したとしても、人々は、自分たちの思いで、今見ている光景を、自分の期待通りに映し代えて、変換して見てしまったと思われるからです。どれほど弱く見えても、本当は強い方である、そのように見てしまうということです。だからこそ、最終的に自分がどのような王であるかを、イエス様が明確に示す出来事とは、人々の前での十字架の姿に他ならなかったのです。

20世紀にポストモダンという表現がありました。21世紀に入った今は、もうそのポストモダンの時代に入っています。そして、テロリズムとの戦いから始まったともいえる21世紀は、善悪が相対的になった時代とも言われています。それは、正義と大義がぶつかり合っている時代とも表現されます。確かに、正義の軍隊、あるいは正義の武力の執行というような概念は、表現しにくい時代といえます。しかし、戦いや紛争がなくなったのかということ決してそうではなく、世界各地でそれらは繰り返されています。また、現在も自分たちの国についての歴史理解を新しく表明し、新たな歩みを準備している国もあります。そのような人々にとっては、正しい戦いという概念がまだあるのかもしれない。

先週も触れましたが、わたしたちの住む国が、第二次世界大戦という大きな戦い終わった後、76年にも及び、戦いに関わらなかったことは、大切にすべき事柄である同時に、世界的な規模で見ても幸運な事柄であると思います。ただし、そのような現象の基となる理由は、一つではないと思います。また一つだと考えてはいけないと思います。なぜならば、たくさんの要因が重なって起こった現象であり、人間的な考えや思い、法律や制度だけで、達成できたとは思えないからです。そして、何よりわたしたちが、日本では少数に過ぎない教会の交わりと信仰を通して、イエス様がどのような王であることを自覚し続けることも、その理由の一つであると思うからです。

イエス様は、約二千年前のエルサレムという町で、堂々と弱々しい王として入場されました。それは、自分の力でこれから何かを達成しようとする姿ではなく、主なる神様が何かをして下さることを期待している姿だといえます。そのイエス様の入場の姿は、人間の期待通りの姿で何かが起こることはないが、人間の思いを超えた、何かが起こる、そのことを示します。その意味で、イエス様は、わたしたちが信頼すべき、忠誠を尽くすべき、王に他ならないのです。この王様についていくと、決してこの世の勝利はないかもしれません。しかし、本当の勝利があります。それは一部の人々が喜ぶ勝利でもなく、また勝ち抜いた人だけが得られる勝利でもありません。しかし、その勝利を信じる時、誰一人それから漏れることのない勝利です。なぜならば、その勝利は、イエス様が十字架で示された命、死を超えた本当の命に裏付けられているからです。そして、この世界のすべての人が、死という終わりを迎える存在であるからです。この世界に、主なる神様が「よし」とされた、本当の命を感じられるような平和が訪れを目指すことは大切です。しかし、だからこそ、わたしたちは、イエス様が示した、終わりであり始まりにある勝利を、わたしたちの教会を通して、信じ続けたいと思います。